更に贈る歌一首　并せて短歌

三九六九番

大君の　任けのまにまに　しなざかる　越を治めに　出で
て来し　ますら我すら　世の中の　常しなければ　うちな
びき　床に臥い伏し　痛けくの　日に異に増せば　悲しけ
く　ここに思ひ出　いらなけく　そこに思ひ出　嘆くそら
安けなくに　思ふそら　苦しきものを　あしひきの　山き
へなりて　玉桙の　道の遠けば　間使ひも　遣るよしもな
み　思ほしき　言も通はず　たまきはる　命惜しけど
せむすべの　たどきを知らに　隠り居て　思ひ嘆かひ
慰むる　心はなしに　春花の　咲ける盛りに　思ふどち
手折りかざさず　春の野の　繁み飛び潜く　うぐひすの
声だに聞かず　娘子らが　春菜摘ますと　紅の　赤裳の
裾の　春雨に　にほひひづちて　通ふらむ　時の盛りを
いたづらに　過ぐし遣りつれ　偲はせる　君が心を　愛
しみ　この夜すがらに　眠も寝ずに　今日もしめらに　恋
ひつつそ居る